

達成度

A: ほぼ達成できた
C: やや不十分である

B: 概ね達成できた
D: 不十分である

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
未来を切り拓く豊かな人間性と創造性の育成	1 自主活動の推進 2 心の教育の推進 3 学力向上の推進 4 健康安全教育の推進



3 目標・評価							
自主活動の推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	学校行事 の充実	学校行事への 意欲的な参加	・生徒の学校生活満足度80%以上を目指す。 ・学校行事満足度85%以上を目指す。	・主な行事は、生徒による実行委員会で運営し、生徒が主体的に活躍する場面を意図的に設定する。	A	・行事担当の先生方のアイデアやほかの職員の協力で、生徒たちも87%が達成感を感じていた。	・昨年とは新しい活動や取り組み方があり、生徒への興味関心を高めることができた。さらなる工夫で授業時間確保ができるよう計画を立てたい。
	生徒会活動 の充実	自主活動の推進	・自主活動の充実度80%以上を目指す。 ・ボランティア活動を推進する。	・計画から運営までの実践力を養うため、月1回、長期休業中なども利用しリーダー研修を行う。 ・ボランティアカードを活用し、ボランティアスピリット賞を授与する。	B	・リーダー研修が計画的に進められなかった。 ・保護者からの評価は70%以上であったが、生徒全体では70%にも届いておらず、特に2年生の充実度が低い状態にある。 ・カードを利用し、積極的にボランティアを行うことができた。	・職員からの評価が50%にも届いておらず、一部の生徒だけの活動になりがちであることから、活動方針を全員が理解したうえで、各委員会で生徒と教員が目的・計画を明確にし、進めていく必要がある。
	健康・体づくり	部活動の推進	・保護者や地域と連携し、部活動の意義を踏まえた活動を推進する。	・保護者や外部指導者と話し合いの場を全体と各部で年間1回以上設け、共通理解を図る。 ・部活動の臨場指導。	A	・地区中体連では多くの部活動が好成績を上げ、県大会・九州大会へ出場することができた。 ・90%の生徒たちが積極的に部活動に参加できている。	・保護者や外部指導者と話し合いの場をさらに密にし、部活動の運営について共通理解を図りながら指導をおこなう。

心の教育の推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	心の教育	自他共に認め合う思いやりのある集団の育成	・主体的によりよく生きる力を育むための、考え・議論する道徳教育を推進する。	・よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、その基盤となる年間35時間の道徳の授業を行い、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を養う。 ・学期に1回以上、グループエンカウンター等を実施し、仲間づくりの土台となる雰囲気づくりに努める。また、人権講話や人権学習などを通して、違いを認め、相手の痛みに共感できるような人権感覚を高める。	A	・生徒の評価では、1年生73%、2年生80%、3年生84%という結果が出ており、3年間を見通した継続的な取り組みが効果を上げ、生徒の心が豊かに育っている。 ・全学年で、考え・議論する道徳を毎週実践することができた。	・平成31年度より道徳の教科化がスタートするため、今までの研究の成果を生かしながら、全職員が実践できるように共通理解し、定着させていく必要がある。
	いじめ問題 への対応	実態把握と 相談体制の充実	・いじめの未然防止、早期発見に努める。 ・学級・学年及び学校全体での支持的風土づくりを行い、QUの学級生活満足群を60%以上にする。	・生活アンケートを毎月実施し、いじめの未然防止に努める。 ・エンカウンターやQUテストを活用した学級、学年集団づくりを進める。 ・SSTなどを活用し、人と関わるためのスキルを身につけていく指導の推進を図る。 ・臨場指導を心がけ、生徒の活動によりそう姿勢での指導を徹底する。	B	・生活アンケートによる定期的な情報収集が不十分であった。 ・QUテストの結果分析を、学級づくりに活用した。11月の結果では、2年生が学校生活満足群68%と目標値を上回った。 ・学年や関係職員で、授業や日常生活の中で人間関係を構築するための取り組みを行った。必要に応じて全職員で情報共有を図り、早期対応に努めた。	・生活アンケートの定期的な実施を確実に行う。 ・教育相談体制の充実を図る。 ・エンカウンターやQUテストを活用した学級、学年集団づくりを進める。 ・道徳教育の充実を図る。
	不登校対策	生徒が安心して学校に通える環境づくり	・教育相談の充実。 ・生徒、家庭に寄り添った対応で、登校や教室復帰、進路選択を図る。	・SC、SSW、SSF、適応指導教室等、関係機関との連携を図る。 ・年2回、教育相談週間を設ける。 ・不登校生徒等、気になる生徒に関する情報交換を定期的に行う。	B	・関係機関と連携して不登校生徒の支援を適切に行った。 ・保護者連絡や教師間での情報交換を定期的に行った。 ・年2回の教育相談週間を計画的に行うことができた。	・引き続き関係機関と連携し、家庭とも協力し、それぞれの生徒に合った支援をおこなっていく。
	特別支援教育	個性やニーズに 応じた支援の充実	・生徒一人一人の実態に応じた自立へ向けてのきめ細かな指導を行う。 ・生徒への啓発活動で、特別支援への理解を深める。	・特別支援教育コーディネーターを中心に組織的な支援の推進を図る。 ・卒業後の進路を見据え、関係機関との連携を図る。 ・通級教室を活用し、個に応じた指導を行い、学習支援や生活支援に努める。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や応用行動分析の考えを取り入れた行動への対応方法を教職員に普及させる。	A	・一人一人の状況を把握し、特別支援教育コーディネーターを中心に、配慮の必要な生徒については、通級指導教室や支援学級と連携しながら対応した。UDを取り入れた授業や生活環境を整えた。 ・生徒や保護者への啓発活動は課題。	・支援が必要な生徒への支援の充実の為に特別支援教育について生徒への啓発活動を積極的に行う。 ・今後もUD的な視点を取り入れて指導・支援にあたる。
	生徒指導 の充実	基本的生活習慣 の確立	・規律ある学校生活を樹立させる。 ・清掃指導(自問掃除)の徹底に努める。 ・情報モラルの指導の徹底を図る。	・毎月調査を実施し生活実態のきめ細かい把握を行う。 ・職員の臨場指導により、自問掃除の徹底を図る。 ・生徒や保護者と信頼関係を築き、相談しやすい雰囲気を作る。 ・SNSをはじめとした情報モラルについて、実際に起こりうる場面を想定した指導を行う。	A	・生徒会生活委員会との連携をもっと活用すべきであった。 ・自問掃除は、少しずつ定着してきたが、基本の徹底と深化を進める必要がある。 ・SNSをはじめとした情報モラルについての指導を行った。	・生徒を育てる大人としての同じ立場で、教師と保護者が連携していくことが重要である。 ・自問掃除における職員の臨場指導を、徹底する必要がある。

学力向上の推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	学力向上	基礎学力の向上	・基礎的・基本的な学習内容の定着 ・全国・県学習状況調査において、全教科とも県平均を上回る。	・国語(漢字)・数学(計算プリント)・英語(文法/単語プリント)を毎日宿題にし、提出を徹底させるとともに、添削指導を行う。また、「家庭学習のしおり」をもとに、継続指導を行う。 ・有田っ子スタイルをもとに学習習慣や学習規律を徹底する。 ・数学・英語・理科におけるTT指導によるきめ細やかな指導を行う。	B	・基礎的、基本的な学習内容はおおむね定着している。特に、国・数・英の毎日の宿題添削により、漢字の読み、数学の計算力、英語の言語知識の向上が見られた。 ・12月の県学習状況調査では、1年数学、理科、英語、2年数学、英語において県平均を上回った。ただ、「思考・判断」「理解(読む・聞く)」に課題を抱えている。	・各教科の授業において、資料を活用したり、根拠や理由を明らかにしたりして自分の考えを述べる場面を工夫する。 ・宿題を出せない生徒への個別指導の時間確保や家庭との連携に努める。
	教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	職員のICT機器 利活用能力の育成	・職員が研究授業を実施し、ICT機器の利活用が行われる環境を作る。	・導入された機器やソフトについての利用に関してICT支援員の方と協力して研修を行う ・研究授業でのICT機器の活用、ICTを活用した授業の提案、ICTを活用した研究会への積極的な参加を促す。	A	・研究授業では、「道徳」でも効果的に電子黒板を活用するなど、指導方法にも工夫が見られた。各教科の授業でもICTを活用した授業が展開できていた。 ・生徒、職員からは8割以上の高い評価が得られた。	・生徒が気軽に質問できるようにし、ICT機器を利活用しやすい環境づくりに努める。 ・ICT利活用に関する情報発信を職員に行う。
学校運営	教職員の 資質向上	指導技術の向上	・平成31年度からの道徳科の全面実施に向けた授業と評価の工夫を行う。	・授業研究会を実施し、全職員が1回以上関わるようにし、相互参観をする。 ・自己を見つめ、成長を実感できる評価の研究に取り組み、指導に生かせるようにする。 ・HUMAN を活用した研修会を実施し、評価や授業づくりに生かせるようにする。	A	・全職員が1回以上公開授業を行った。授業研究会で、成果と課題を出し合い、授業の工夫・改善につながった。 ・授業づくりや評価について、講師を招いて研修を行った。具体的な評価の方法と授業にどう生かすかなどについての研修を深めることができた。	・今年度の取組を継続させながら、生徒が成長を実感できるような評価を行い、道徳の授業の工夫・改善につなげていく。

健康安全教育の推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	健康・体づくり	食育の充実	・規則正しい生活習慣と食の大切さを認識させる。 ・給食の残菜量を減らす。	・PTA活動と連携した食育の実施。 ・全職員での給食の臨場指導。 ・「食育便り」による啓発。 ・残食調査を行い、各学年・学級に知らせる。	A	・「おにぎり持参給食」を実施し、家庭との連携を図った食育を行った。今後、食育便りの発行ができなかったため、教科との連携を図りたい。 ・生徒会保健部での活動で、放送による食器の返却や残食についての呼びかけができており、ほとんど残食はなかった。	・家庭科との連携を図り、学習した内容や食育に関する行事をお便りfで発信し、食に関する関心を高めていく。 ・継続して、全職員による給食の臨場指導を行い、衛生面やマナーの意識を高めていく。
		健康教育の推進	・健康な生活を送る為の基本的生活習慣の定着を図る。	・各種健康診断を活用した保健指導の実施。 ・町の健康福祉課と連携した思春期教室の実施。 ・学校三師や関係機関と協力した講演会の実施。 ・「保健だより」や掲示物による啓発。	A	・各学年に応じた保健指導や講演会を町健康福祉課や関係機関、学校三師と連携して実施できた。 ・学習した内容や知識を定着させる為、各教科等との連携が必要である。	・各種講演会等に保護者の参加を呼びかけ、家庭での協力を促す。 ・生徒会活動を活発にして、健康的な生活習慣の定着化を図る。

4 本年度のまとめ・次年度の取組
生徒は、学校行事や部活動には自主的に熱心に取り組むことができた。それを支える教職員も生徒に達成感をあじわせるため指導・支援をすることができた。校内研究では、研究主任や道徳教育推進教師を中心に全職員で道徳教育に取り組み、TTによる授業や研究授業も頻繁に行ない、指導力の向上を図ることができた。生徒・保護者も道徳授業への学校の取り組みへの評価が高く、道徳の実践力を育てることができた。生徒も道徳の授業を通して、互いを認め、思いやる心を育てることができたと考えている。不登校の生徒については、教育相談担当を中心に連携して対応しているが、早期に児童生徒のメンタル面の把握を的確にするためにも、定期的なアンケート実施を確実にすることが課題として挙げられる。また、学力向上に向けて取り組んできたがまだまだ十分とはいえず、今後も授業の改善や指導力の向上に向けて家庭と連携しながら取り組む必要がある。